

服部 しほり

一九八八年、京都市生まれ。二〇二二年、大学の仲間と共に日本画グループ「景聴園」を結成。二〇二三年京都市立芸術大学大学院を修了。個展、グループ展を中心に発表。国内外のアートフェアでも紹介されている。会場では、日本画の伝統的要素である線を用いて、日常の出来事から着想されたユニークな人物像を描いた作品を出品。二〇一八年、長崎県天祐寺へ襖絵を奉納。

青山 今回の七人の出品作家の中で一番若く、二〇一三年に京都市立芸術大学大学院を修了して五年目です。個展を中心として、岐阜では美術館のすぐ近くの田口美術さんで発表しています。京都や岐阜、東京のアートフェアなどでも発表しています。二〇一一年に東京アートゲートプログラムで紹介され、割と東京では早い段階で発表しています。

服部 そうですね。学部のことやっただと思います。

青山 出品をお願いしたとき、現代美術としての日本画を見てもらいたい、制作の中で線を大事にしている服部さんの作品は日本画の可能性の一つを示しているとお話しました。そのときの思いを。

服部 紹介文でも書いていただいているとおり、日本画のグループで景聴園というものがあって。三か月前（註一）に展示させていただいたのですが、その時のテーマが「日本画は定義できない」というものでした。われわれ作家界隈や芸術大学の中

でも、日本画というものがどういうものなのか、今までも日本画について語られてきましたが、今一度みんなが聞いただしてきている世の中なのだと思います。なので「日本画の逆襲」と聞いて、景聴園のテーマとすごくリンクを感じたのと、私自身も日本画というものに強いこだわりを持っているので「お、来たな」と思いました。嬉しかったです。

青山 京都に生まれ、京都市立芸術大学に進学しています。京都は造形大学もありますし、大阪にも芸大はありますが、ここを選んだのは何か理由が？

服部 単純に短く言うと、近くだからです（笑）でも大きな理由があつて。私は京都市生まれ、ずっと京都に住んでいます。生まれの岩倉という土地が本当に好きで、本当に故郷を愛しています。なので、京都から出るという気持ちは一切ありませんでしたし、京都は滋賀も含めて五、六校芸大美大がありますが、兄弟もいる関係で公立を選びました。京都が地元だからという理由と、日本画をしようと思ったので、京都以外行かないでおうというのではありません。

青山 京都市立芸術大学は、実は東京藝大よりも古い、歴史ある学校で、日本画家も様々な先生が出ている。構内には日本画家の幸野稜嶺の銅像があるなど、歴史を感じる大学です。川嶋渉教室でしたよね。川嶋先生も京都市立芸術大学が持っている、稜嶺がつくった粉本の模写を指導に用いるとか、伝統的なことを指導の中に意識していると思います。岐阜の長谷川喜久さんと一緒に古墨収集をしているとも聞きました。伝統的な素材や教え方に興味を持っている先生だと思います。川嶋先生の教室が制作に何か影響を与えた部分はありますか？



註一「第4回 景聴園 となりあう借景」2017年6月29日〜4月9日（会場：gallery Mani' LUMEN gallery）

服部 川嶋渉先生には大変お世話になったんですけども、川嶋先生は日々日本画のお家ということもあり、若いころから色々なことに敏感だったそうです。改めて若いころに日本画の画材に魅力を感じ、沢山収集されてこられました。先生のコレクションを学部のところから見せていただきましたし、沢山の知識を得て、色々なものを試すことができました。ただ、京都芸大というのは描き方を教えるという学校ではなくて、精神的なことや積み重ね…なんというんですかね、課題を積み重ねて、その後に自分で表現する。あまり硬い指導はされなかったんで、それが逆に私をのびのびと育ててくださった原因かなと思います。

青山 書道を学んだということですが、作品を見たときにすごく抑揚のある力強い線が見たときに目に入ってきます。題材としては仏画に通じるところがある。最後にある《寒山拾得図》の表現はともユーモラスなだけでも、寒山拾得というのは禅宗の絵画で、常人を超えた悟りを持った存在として描かれる。日常を超越した人物を描いた仏画、禅画なんですよ。そういった題材をあえて選ぶのに、何か影響しているものがありますか？

服部 《寒山拾得図》に関しては、私が初めて既存の画題を描いた作品です。今回展示されている四点の中では最も新しいですが、逆にあれは珍しいです。普段、作品に関しては自分のすぐく身の回りのこと、ありふれた生活のことを描いています。例えば《展墓記》はお墓参りの絵だったり、《閑寂》は東京に行ったという絵だったりするんですけども、そういうふうには本当に身近な自然な生活、当たり前を送っている生活を題材にしています。それが仏画に直接的につながっていると私は思っています。

仏画というのは曼荼羅であったり、ご本尊のお姿を描かれているのが大抵だと思うのですが、私は何を描いても仏心があれば、仏画であると思っています。なので、こういうものを描いても、仏画になる、たらしめられると思っていますし、もつというとは蟻一つを描いても仏画になると私は信じています。なので仏画というと、いわゆる仏様のようなものというものを思い浮かべますけれども、私は日常のふとした生活から宗教に導かれる、つまり禅宗を勉強させていただいて日々過ごしているので、そういうところから自分の絵が仏画となればいいなと思っています。

青山 《寒山拾得図》と《展墓記》は第四回の景聴園で出品されたものですね。景聴園はご自身が仲間の声がけしてつくられたグループだと聞いているんですけど、一人で制作するだけでなく、仲間を募ったというのは何か意図があるんでしょうか？

服部 日本画のグループ景聴園というものを関西中心に活動しています。在学中に始めたので、メンバーは同年代の全五人の作家とキュレーターとデザインの者計七人で活動しています。それを大学院の一回生、五年ぐらい前に思いついて声をかけ始めました。私は作家として個人活動、一枚一枚、一生懸命制作して、多くの方に応援いただいて展示していますが、時代をつくる、歴史をつくるというものはもちろん一人でできるんですが、何かムーブメントを起こすということが必要だと思います。例えば、美術館である展示が沸き起こったであるとか、アートの大きなイベントがあったというの大きいと思います。私ができることは何かというと、個人でできることも大きいんですけど、団体として歴史を、日本画の歴史の中である活動を継続して起こすことが必要だと感じたというのが発端ですかね。

青山 今、歴史とおっしゃいましたが、日本画といういわば伝統を意識せざるをえない絵画で、ご自身も今までの歴史につながっていく者として意識しますか？

服部 日本画グループ景聴園としていますが、グループの中でも各々色々な活動をしています。完全に現代美術としていらっしゃる者もいますし、がつつり公募展の会員の者もいます。私はどうかというところ、無所属で画廊さんやギャラリーさんでの展示を中心に活動しています。日本画への考え方も様々で、私は日本画というものをすごく信じています。日本画というものの。一番初めに新恵先生も仰っていた、日本画という言葉自体は明治に始まったことですけども、日本というこの国で絵画が始まった、それが続いているのは絵画でいうと千三百年くらいの話だと思いますが、私はその歴史に続きたいという思いがすごくあります。私がこういう絵を描いているのはこの国でしか生まれることのなかった、この国で必然として生まれた美術を引き継いでいくということ念頭において描いています。なので、日本の中で絵画を描いてきた方、歴史に連なっている方に並びたいという思いがすごくあります。

青山 服部さんの魅力は線だと思います。美しい女性像や写実的な人物像を多く見かける中で、ご自身の作品は中年のおじさんが胸をはだけていたりして衝撃を受けました。そこが同じ日本画といっても、日本画は幅広いことを許してくれる、自由度の高いものだと思います。人物画中心に出していただけませんかとお願いしました。こちらの《閑寂》は二〇一三年の年末、十二月ごろでしたか。

服部 制作は二〇一三年、発表は二〇一四年ですね。

青山 日常を描いているというところ。

服部 この作品は二〇一四年の三月、アートフェア東京で初めて個展をさせていただいたときに出品したものです。田口美術さんから出させていただきました。東京で初めて個展をするということで、意気込んで制作した作品です。どの作品のおっさんもまず前提として、すべて私です。《閑寂》は左の人が私で、《展墓記》の赤い人が私。《寒山拾得図》では下の方が私。すべて自画像で、私の気持ちを描いています。東京にやってきましたぞという絵を描きました。

青山 作家は表現の中で自分がどこか投影される、自然を描いていてもどこかに自分が投影されていないと自分の絵ではないとよく言いますが、作品には自分自身が投影されてこそという思いがあるのでしょうか？

服部 実は学部時代は自分自身の感情や気持ちを「自画像です」と言い切ることにすごく違和感がありました。女性という性にもすごく違和感があつて。女性なんです。自分というものにも抵抗してきて、感情をぶちまけたような表現や絵がすごく嫌で、自分というものをなくした理論的な、理性的な絵を描くことを目標としたこともありました。ただ、結局ふりかえってみると全く理性的ではなくて、そこに表れていたのは自分であったり、自分の気持ちだったりということがあつて、まあ人間なので自分自身が投影されることは不可避であつて、だからこそ創作物であつて芸術なんだなあと思うことがそのうちできるようになって、今は認めています。

青山 すべてに自分が投影されるというのは作者の方のお話しならではだと思いません。グループの活動を通じて、歴史に連なりたいというの、若い作家なのにものごく将来を見据えているところが頼もしい。こういう若い作家たちがしっかりと活動



している中で、日本画に限らず、日本の絵画、表現に携わる人たちの未来の希望と可能性をすごく感じて、心強いです。ぜひみなさんも作家の活動を応援していただければと思います。